**原田武夫White boardseminar Vol.16（2015.2.10）**

（<https://www.youtube.com/watch?v=X460ZOCZPXo>）

みなさん、こんにちは！今回はホワイトボードセミナー第１６回目といたしまして

“Quo vadis？欧州はどこに向かうのか？”と題してお送りしたいと思います。

えー、ヨーロッパですね、大変なことになってる。特にですねギリシャ勢がですね、

今、大変な大騒ぎを起こしているわけであります。

“Grexit”と言う風に言いますけども、このことを中心にですね

いったいこれから何が起きていくのか、そして私たち日本人にとってですね、

どういった課題がですね、これによって生じるのかについて考えてみたいと思います。

まずですね、今申し上げました“Grexit”って言いますけれども

これ“Grexit”というのは、ギリシャ勢がですね、

ギリシャという国家がユーロ圏に入ってるんですけども

ここからですね、「私たちは抜けますよ」という風に、言い出してるわけです。

なぜこんなことを言い出してるのかと言うと、

そもそもですね、ユーロ圏、ユーロという共通通貨を使うためには

財政赤字をですね、一定程度抑えなきゃいけないということになってます。

ところがですね、この財政赤字を抑えるということをですね

やるにしても、とにかく景気悪くしちゃ仕様がないので

まーなんだかんだとですね、とにかく借金をして

色んな国々はですね、がんばってやってるんですけれども

それだけでもギリシャ勢はですね、

「いや、そんなもん基準どころではない」と。

「とにかく私たちの国は今、景気が悪いのでどんどん借金をしなきゃいけないんだ」

と言って、国内だけでお金を回せばいいんですけども

「お金ないんでちょうだい」と。

ユーロ圏からですね、「我々が抜けちゃったら大変なことになるだろう」と。

ではですね、ＥＵの、とりわけドイツから「お金ちょうだい」

という風にやってきたわけですね。

ですので、この“Grexit”ですね、結局これは“恫喝”なわけであります。

起きたらばどうなるのか。要するにですね、

これはユーロ圏…すなわちですね、共通通貨という仕組みが作られたにも関わらず、

１９９９年に作られてですね、１６年で壊れちゃったよと、いうことになった場合ですね、

これギリシャの次は、必ずイタリア来るんじゃないかとかですね、

それ以外のスペインは大丈夫なのかとか、

色んなことが生じて、このユーロというものに対するですね

通貨に対する信頼が、大きく崩れるということになってきます。

（2：02）

これは大変なことなわけですね。

とりわけこのユーロをですね、支えてるのは明らかにドイツですので

ドイツ経済がですね、信頼失墜するということになりかねない訳であります。

ですので、“起きたらばどうなるのか？”というとですね

じゃあ、これが起きたらば為替レートがですね、ユーロが大暴落する…

ということを通じて、為替レートが非常に大変動すること、

これを通じてですね、ま、特に今申し上げたように

ドイツは自分自身のですね…要するに自分自身が支えてきたこのユーロが

大変な減価、すなわち価値が下がってしまうということについて

ネガティブなインパクトありますけれども

それ以外の通貨はですね、グーッと上がっちゃうわけですね。

なのでポンドにしろ円にしろドルにしろですね、他の通貨はグーッと、

対ユーロ為替レートでですねもう一気に上がるというですね、

大変なことになりかねないわけであります。

（2：44）

じゃあですね、今いったい何が起きているのか？、

このことを考えるに際してはですね

一番最初、実は考えなきゃいけないことはですね

ま、目先の金利がなんだかんだということではなくて、

ヨーロッパでは、そもそもですね、根深い対立軸というのがあります。

で、具体的にはですね、例えばひとつは

“イギリスvsドイツ・フランス”というのがあるんですよね。

で、何で私がこんなこと言い出すかというと

ギリシャはですね、新しいチプラス政権と言いますけど、

これの財務大臣が真っ先にどこに行ったのかと言うと

オズボーン（イギリスの）財務大臣のとこに会いに行ったわけですよ。

ということは「こいつら、グルだなｗ」と、いうことなんですね！

しかもですね、どうもこのギリシャの急進左翼政権というのはですね、

背後にロシアの臭いを感じるんですね。

結局ですね、今ロシア勢は、

City of Londonを中心としてイギリスへと実はくっついていて、

このですねドイツ、フランスという大陸欧州ですね、

これらの伝統的な、中心的な勢力をですねどうも追い詰めようとしてるんじゃないかと。

これが結局ですね、メルケル（ドイツの）首相、

そしてですね、アメリカは一斉にこう、ウクライナ問題でですね

「経済制裁をかけるべきだ！」と言ってるのに対して

「いや、ちょっと待ってくれ」と言ってですね、２０１５年の２月１１日にですね、

ベラルーシのミンスクで４者会談を行うという風に

外交努力をする根本的な原因になってるんじゃないか。

すなわちですね、ドイツ・フランスが今、イギリス・ロシアに挟み撃ちになってる、

その１つのコマとしてですね、このギリシャは使われてるんじゃないか。

つまりですね、このままウクライナ問題に譲歩がなければ

じゃあ、ギリシャを使ってですね、ギリシャにユーロ圏をですね壊させちゃうよと、

要するに“Grexit”させちゃうよという、全体としての構図が見え隠れするんですね。

（4：19）

やはりですね、この大陸欧州のですね、この中心的な勢力である

ドイツ、フランスに対する、ある種のルサンチマン（※1）というかですね、

最初に感じられるわけですよ。

で、仮にそうなった場合ですね、ドイツ・フランスの中では

いったいどういうことになるかというと、結局、景気が一気に悪くなる。

ま、フランスでは既に悪くなってますけれども、この間はですね、銃の乱射事件によって

今一瞬だけオランド政権はですね、求心力をまた保ち始めていますけれども

ドイツはですね非常に不動産バブルでですね、すごい儲かってますけど

これがガクッっと来ると、一気に来るんだと思うんですね。

そうなってくると、やっぱり金融資本主義は間違いだったんじゃないかと。

そもそも今までなんで、こんなユーロなんてのを導入してきたのか、

ドイツ・マルクがいいんじゃないかと、言う話になってくるんですね。

で、そもそもなんでこんなこと言い出したのか？

誰が悪いのか？と、いう所でですね、出てくるのが…

“ユダヤ人”問題なんだと思います。

すなわちですね、このユダヤ人がやっぱり悪いんじゃないか

ということで、ポグロム（※2）ですね、

えー、いわゆるホロコーストとも言いますけれども

ユダヤ人に対する、大変な仕打ちが全ヨーロッパで

始まる可能性があるのではないかなという風に思うわけです。

（5：19）

で、この辺の問題ですね、あんまりあのー、

イスラエル的な言論？としてしか、知らないかもしれないですけど

ぜひこれ、野村真理先生と言うですね、非常に立派な先生でありますけれども、

女性の先生ですが、この先生が書いた『ガリツィアのユダヤ人』（<http://amzn.to/1AeZAsL>）

という本がございます。

こちら人文書院というですね、非常に…専門書を出されてる出版社で出てるんですけど

これぜひ、読んで頂きたいんですね。

“ガリツィア”って今、ないわけですよ。

なんでないんだというと、要するにここはですね、

ポーランドそれからウクライナの間にあって

まさにユダヤ人たち、ここが根本なんですよ。

ここからポーランドに散って、ロシアに散って、

オーストリアに散って、ドイツに散ってというような

後のナチズムによって大弾圧を受ける

いわゆるアシュケナジーと呼ばれるユダヤ人たちなんですね。

で、これはですね、実は１９４５年８月１５日、太平洋戦争終わりましたけれども

欧州戦争は５月に終わったわけですね。

で、この５月に終わった直後もですね、実は

ポーランド人たちとか、あるいはウクライナ人たちから

大変な目にユダヤ人たちはあってた、というのがこれに書いてあります。

すなわちですね、これドイツ人だけの問題じゃないんですね。

ヨーロッパ全体としてユダヤ人問題というのがあるんだと。

これが噴出してくるだろうというのが、私どもの研究所の考え方でありですね、

いわゆる国際情勢、グローバルマクロ（※3）を追っている人たちのですね

基本的な考え方でございます。

（6：27）

えー、こうなった時にですね…

“最終的な勝者”はじゃあ、誰なんだ？ってことですね。

色々ごちゃごちゃしてますけど、じゃ誰が勝つのか？

こうなったらですね、ドイツはもうユーロなんて支えてる場合じゃないと。

もう自分自身で、自分の通貨に戻ろうという動きをですね

真っ先に示す可能性があるんじゃないか。

その証拠にですね、フランスそれからアメリカに預けていた金を

レパトリエーションって言いますけど、

どんどんどんどん金準備を取り返してるんですね。

もう間違いなく“金”というのが非常に重要な役割になってくる。

どうしてかというとですね、これから先

まぁユーロがですね、ユーロ①、ユーロ②ってなるかわかりませんが

ユーロが分裂する…あるいはですね、米ドルというのが

なかなか使われなくなってくる、人民元が出てくるとか、色んなことになってくると、

結局、共通の価値って何なんだろうなっていう話になってくるわけですよ。

この共通のですね、価値基準を設定してる、それはですね

いったい何なのかというと、結局“金”なんだろうと。

最終的な勝者はですね、実は金を仕切ってる人は誰なんだ？ということですね。

これはもう、明らかにですね、金の産地というのはいったいどこなのか、

大規模な金の産地はどこなのかと考えると

これは、基本的には大英帝国…旧大英帝国なわけです。

すなわちこれは、City of Londonが最初から考えてる話なんじゃないかな？

という話になってくるんですね。

（7：34）

これ、私どもマンスリーレポートでですね、以前City of Londonのですね、住人たちが

今後の通貨制度についてどう考えてるのかということについて書いたことがありますね。

そこにはっきり書いてあるのは、３つぐらい可能性書いてあるんですけれども

そのうちの１つはですね、明らかに複数通貨制度になってでも

なんらかの価値尺度が必要なので、結局“金”になるというのが出てきてます。

ですからね、どうもこの話にはイギリスが背景として感じられ、

同時にですね、どうもCity of Londonの意向がですね、窺えれるわけであります。

ですので、すべてはですね、最終的には

“volatility（※4）の維持のため”ということもあります。

しかしながら最終的にはどうも、“金”という実物資産に収斂させようとしている…

これどうしてかと言えば、デフレ経済になってきたらですね、

大量の通貨は必要ないわけです。

特に“不換紙幣”…実物経済の裏側のないですね、通貨というのは

出回ってても何の意味もないわけです。

ですから、デフレ経済、身の丈に合っただけの通貨量にするためには、

実物資産の裏付けがある形での通貨体系に留める必要があると。

そうなって来た時に、結局ですね今までの通貨っていらないよと、

ユーロってなんだよ！と、結局裏付けないんじゃないか

ということでふっとばされちゃうと。

そこで色んなvolatilityが起きて、これがまたですね、デフレ経済のおもてにおける、

かろうじてですね、volatilityで金融資本主義的なものがですね、残っていく…

要するに、上がったり下がったりするので、儲けていく

ということに繋がって行くんじゃないかなと。

だからCity of Londonがですね基本的には、

ここで大きな動きを示しているのかなぁという風に思うわけであります。

（9：00）

ぜひ皆さま方はですね、今起きてることっていうのは決して偶然ではなくてですね、

あらかじめ企図されていることであるということで、考える必要があると思います。

特にギリシャ勢、そしてギリシャ勢を入れる大きな要因となったのはイタリア勢です。

イタリア勢をユーロに入れる、これをですね決断したのは

ドイツのヘルムート・コール首相です。

このドイツの当時のヘルムート・コール首相はですね、

周りの側近たちは、「絶対イタリアとか、ましてやギリシャなんて入れちゃいけません」

と言ったのに対して「いや、これは入れなきゃいけないんだ。」

と言って入れた、というのがあります。

じゃあ、このヘルムートコール首相はですね、いったい何党なのかと言えば

これはですね、キリスト教民主党なんですよ。

すなわち<strong>キリスト教</strong>民主党だってことです。

すなわちですね、ここではやっぱり

バチカンの姿が見え隠れするなと言うことなんですね。

ですのでね、まぁヨーロッパはですね、なかなかこう

単純に金利だとかなんとかって言うことではなくて、

歴史的なこういった構造ですね、これについて考えておかないと

ま、“Quo vadis？”…これラテン語でございますけれども

“これからどこに向かうのか？”ってことがわからないんだろうというのが、

私どもの研究所のですね、基本的な見解でございます。

そして同時にですね、これユーロが大変なことになったらば

強烈な円高という風になります。

今、多くの企業はですね、アベノミクス、円安誘導だということで

まぁ、にわか景気に沸いてますけども、そうじゃなくて

今こそ備えるべきはですね、複数通貨制になっていく大混乱の中で

安全資産としての円に、一気に世界の富は流れ込んでくるとなった時に、

みなさま方、大丈夫ですか？と、いう話であります。

このことをですね、ぜひ胸に刻み込んで頂ければと思います。

（10：19）

と、いうことでございまして

ぜひですね皆さま方、私どもの、こう…この辺に案内出てると思いますけども

私どもですね、無料会員制度と言うのがございます。

無料会員制度にですねご登録…弊社のホームページからですね、

簡単にできます。極めて簡単にできますので、

ぜひですね、こちらをご登録頂きましてですね、

私どもの分析、そこにはですね、様々な分析のですね

全てではありませんけども、かなり重要な部分がですねご覧頂けるようになってます。

今言った欧州勢の話も含めてですね、ぜひ、参考にして頂ければと思いますので

１人でも多くですね、無料会員制度にご登録頂ければという風に思います。

それを通じてですね、私どもの研究所と一歩一歩歩み寄って頂いてですね、

さらに確かな明日を掴んで頂ければと思ます。

以上、原田武夫でした。

（完）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

※1ニーチェ用語。被支配者あるいは弱者が、

支配者や強者への憎悪やねたみを内心にため込んでいること。

（[http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%EB%A5%B5%A5%F3%A5%C1%A5%DE%A5%F3?kid=18343](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%EF%BF%BD%EB%A5%B5%EF%BF%BD%EF%BF%BD%EF%BF%BD%EF%BF%BD%DE%A5%EF%BF%BD?kid=18343)）

※2ロシア語で「破滅・破壊」を意味する言葉である。

　　ユダヤ人に対し行なわれる集団的迫害行為（殺戮・略奪・破壊・差別）を言う。

（<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%E5%9B%BD%E7%8E%8B>）

※3世界中のあらゆる資産に投資機会を見出す投資戦略の一つ。

世界中の国や地域の主要経済状況や政治的見通しを重視し、

各国の経済、金利、為替などのマクロ指標に基づき投資を行う。

（参考：<http://www.fxcm.co.jp/support/word/k1pgmk000000qchz.html>）

※4金融工学においてボラティリティ（volatility）とは、

広義には資産価格の変動の激しさを表すパラメータ。

（<http://bit.ly/1CVtH5B>）